

「言葉の乱れ」をどう考えるか

坂本 恵

はじめに

「言葉が乱れている」という声をよく聞く。しかし、「言葉の乱れ」は今に始まったことではなく、昔から、常に言われてきたことである。一般に言われる「言葉が乱れている」（以下「言葉の乱れ」）ということとはどのようなことをさすのか、また、それをどのように考えるのかということを考えてみたい。

1 「言葉の乱れ」が意味するもの

「言葉の乱れ」とはたいていの場合、自分の規範と異なる言葉遣いを見聞きした時に発せられるものである。自分の言葉が乱れているという人はあまりいない。相手、第三者の発した言葉遣いが、自分の考える「規範」と異なっていると考えた場合に、その相手や他人を批判する時に使われると考えられる。

この「言葉の乱れ」を研究的な立場から分類すると、「誤用」、「各種方言」、「流行語」、「言葉のゆれ」などが考えられる。

「誤用」というのは、明らかに規範から逸脱したと考えられるもので、書き言葉での誤字もこの一種である。誤用が定着し、普通の言い方と認められてしまうものもある。また、そのように、多用される誤用もあるが、それには理由のあるものが多い。

各種方言というのは、地域によって異なる地域方言に限らず、世代間で使う言葉に違いのあるものも含まれ、これも世代（間）方言と言うことができる。さらには使用者集団を特定できるあるグループでしか用いられないようなものもある。位相の違いから来るものとも言える。地域によって語彙などが異なることは一般に認識され、自分の規範と異なるものを聞いても方言であると許容されることが多く、「乱れ」と考えられないことも多い。しかし、実際には方言とは認識されにくい文法面での違いや、同じ語彙を地域によって異なる使い方をするような場合に、方言によるものと認識されずに、「乱れ」であると受け取られることも多

い。

流行語も「言葉の乱れ」と考えられるものの一種であろう。「流行語」というのは寿命の短い、ある期間しか用いられなかった特異な形、使い方のものであるが、誤用から発生するものもあり、また、方言に端を発するものもある。ただし、新しい形、使い方が流行語であったと認定できるのは、それが使われなくなってからで、使われている間はそうのように認定できない。

「言葉のゆれ」と考えられるものも「乱れ」の一種である。言葉は一般的に時代とともに変化していくが、その変化の過程にある場合、新しい形は「誤用」「乱れ」と考えられることが多い。世代間方言もこの一種であることも多い。若い世代で使われている言葉、使い方が一般的になれば、その時にその新しい形が、変化の過程にあるものであったということがわかるわけである。一時の流行語であるか、変化の過程であるのか、その渦中にある時には判断できない。「ゆれ」と考えられる場合、古い形と新しい形の複数の形が並立していることになり、新しいものは「乱れ」と感じられることが多い。

以上のように分類できるが、これらのものは既に述べたように複雑に錯綜し、どちらとも決められないもの、どちらとも言えるものがある。

2 言葉と規範

一般的に言葉には規範が存在すると考えられるために「乱れ」という意識が生まれる。しかし、言葉と一口に言っても各分野ごとに規範があるもの、ないもの、規範性の強いもの弱いものがある。簡単に「言葉遣いが正しい、正しくない」と言うことがあるが、研究的な立場からはそのように断定できないものが多い。一般的には規範性の強いもの、弱いもの、という程度にしか考えることはできない。

規範のあるなしを分野ごとに考えてみる。文法、音声は自然発生的に規範が存在しているとも言え、例えば、「あ」の音声的な範囲は大体ここまで、などとすることができたり、文法面でも動詞の活用などはほとんど決まっておき、「書く」「書いて」を「書う」「書って」などと恣意的に変えると意味がわからなくなってしまふなど、規範性が高い。とは言え、「信じる」「信ずる」など、活用の変化がまだゆれているものもあり、完全に規範性が確立しているとも言えない。

表記は実際上の要請から人工的に規範を作成したものであるといえる。国語審

議会が長く表記での規範を考えてきたことからわかるように、表記の規範を決めることは公権力に要請された任務であった。私文書では何らの制限がないとは言え、実際には国語政策の中心をなしてきた表記の原則は私的な文書においても指針として考えられている。

語彙、表現では規範は存在しないと考えられる。この分野では歴史的にも変化が激しく、大きい。語彙の面では辞書が規範であるとみなす人も多いが、実際には辞書はいわば「用例集」であり、使われた用例から意味を抽出していることが多く、規範とは言えない。また、辞書類はあくまでもそれまでに使われた用例を集めたもので、新しい形、意味には対応できない。新しい形が「誤用」であるか、新しい使い方であり、何年後かには規範といえるような使われ方をするものであるかを判断するのは非常に難しい。しかし、「言葉の乱れ」は一般的に語形、表現について言われることが多いようである。

3 規範、誤用とゆれー「乱れ」の実際

各分野ごとの「乱れ」の実際について考えてみたい。音声・音韻については「乱れ」が意識されにくい。「変な発音」など、発音の変化などが指摘されることもあるが、一般には意識されにくい。「が」行鼻濁音がなくなりつつあることについては一時問題にする人もあったが、最近ではそれほど聞かれなくなった。また、アクセントとも関係するが、地域方言によって標準的な発音と異なるものがあったも、「乱れ」であると意識されることは少ない。アクセントに関しては地域差の意識が大きいいため、違っていても「乱れ」とは意識されない。一時、過剰なまでの平板化について問題視する声もあったが、最近ではそれも定着したようで、それほど聞かなくなったようである。ただし、一方で、標準的なアクセントとして東京アクセントを考える人もおり、そのような人たちは、標準的なアクセントを期待されるアナウンサーのアクセントについて問題視する傾向があるようである。また、発音関係の「乱れ」としてあげられるものの一つに「半クエスチョン」などと言われるものもある。文末だけでなく、単語についても一つ一つ相手に確認するように語調をあげる言い方である。これは新しい言い方として「乱れ」と反発されることも多い。

表記に関しては、規範が存在するため、逸脱は「誤用」と認識される。ただし、

今までは活字になるものは編集者の手を経たもので、いわば、プロの書き手の書いたものであったが、ワープロの普及で一般の書き手が書いたものも編集者の手を経ないで活字になるようになった。そのため、「一つずつ」と書くべきところを「一つづつ」と書くなど、一時に比べ、誤用が多くなったように感じられる。これを「乱れ」と意識する人もいるだろう。

語彙については規範がなく、意味の違い、使い方の違いが「乱れ」と意識されることが多い。一般に「言葉の乱れ」を言う人は、この部分を問題にすることが多いようである。

文法は規範性が強すぎて、逸脱は「誤用」「不注意」とみなされることが多い。ただし、実際には地方差は存在し、その差は大きいため、違和感を覚えたり、「誤用」であると判断されるものも、地域差がその原因であると考えられるものもある。一方、時代による変化と見られるものも、「誤用」とみなされ、「乱れ」と取られることが多い。その代表的なものはいわゆる「ら抜き言葉」である。研究者の認識ではこれは日本語の歴史の流れの中での必然的な変化だと考えられているが、一般にはこれを糾弾する声は大きい。第20期の国語審議会報告で、いろいろな問題が取り上げられ、かつ、そのように断定したわけではないのに、「ら抜きを許容する」ということだけが大きな反響を呼んだのがその例である。(注1) 現在では、「千円からお預かりします」などの言い方が問題になることもあるが、これらの問題は断定はできないものの、日本語史の流れの一環であると考えられる。この部分の変化は必然性があるものが多い。

これら以外の「表現」とでも呼ぶべき分野に関しては、語彙と同じく、規範がなく、「乱れ」と意識されやすい。最近問題になるものとしては、「～じゃないですか」や、「お荷物の方お預かりします」などであるが、これらも、一過性の流行に終わるものと、何らかの理由があり、定着していくものがあると考えられる。

4 敬語での「乱れ」の難しさ

ここまででは意図的に敬語の面での「言葉の乱れ」を扱ってこなかった。「敬語が乱れている」という批判は「言葉の乱れ」と同様、あるいはそれ以上に聞かれる。もともと、敬語においては「乱れ」ととられやすい要素がある。それは敬

語では確たる規範が存在していると考えられていること、そして、習得が困難であると意識されることなどである。さらに、習熟している年配者が、習熟していない使い手である若者を批判する機会が多いこともあげられる。敬語は言葉の他の面と異なり、主に大人になってから、社会人になってから本格的な習得が行われるものである。それでいながら、敬語を多用しなければならないのは社会的な下位者である若者であり、習熟している年配者はそれを受ける立場にある。言ってみれば、敬語は習熟してしまった段階ではむしろ使う機会が少なくなるということもよい性質がある。このような面があるため、敬語を使いこなせないと感じる、苦手意識を持っている人が多く、実際、誤った使い方もよく見られるのである。それが、「乱れ」と意識されることが多いことに通じている。

さらに問題を複雑にするのは、敬語には文法的な面、語彙的な面、表現の面に加え、運用面も存在することである。敬語、待遇表現の「乱れ」には、今までに上げたような面に加え、もう一つの側面、つまり、使用上の問題があるということである。これがあるから敬語、待遇表現は複雑になるといえる。語形は正しくても、相手、場面にそぐわないものがあり、それが誤用になるということである。敬語、待遇表現は、特に人間関係の認識に基づいて使われるため、誤った使い方をされた人は不快感を一層強く感じることになるのである。この場合は、規範と異なる使い方のための誤用と言うより、期待されるものと異なる使い方であるために起こる違和感から来るものと言うべきかもしれない。

更に言えば、敬語、待遇表現は社会の変化に対応するため、現代のような変化の大きい社会においては規範を決めにくい、規範自体がゆれているとも言えるのである。期待されるものが世代、地域、所属集団によって大きく違っているのである。そのため、「敬語が乱れている」という批判と同時に、「生意気で失礼だ」、「若いものは言葉の使い方を知らない」などという個人、ある世代に対する批判も招いているといえる。

もう一つの問題は、日本語においては敬語の体系があり、人々の意識がそこに集中するため、語彙としての敬語以外の面に目が行きにくかったことがある。敬語を中心とする言葉遣いというのは、主に目上、目下で表される上下関係に基づいた人間関係を反映したものである。しかし、現代の社会において、人間関係は上下関係だけではないし、その他に、場面や用件による違いから来る言葉遣いの

違いは広く扱われる必要がある。研究的にはそれらを含め、「待遇表現」という考え方がされてきているが、一般には、意識や議論は「敬語」に特定されてきたといえる。そのため、敬語が正しいか正しくないか、適切かどうか、だけに意識が集中し、その他の面は気付かれにくいということがあった。その他の面をを意識化する概念がなかったといえる。それを補うために第22期の国語審議会では「敬意表現」という名称で敬語はもちろん、敬語を含まない配慮の言葉遣いを提唱したわけである。(注2)「敬語」を「敬意表現」に広げると、敬語が使われているかどうかにかかわらず、人間関係や場面にそぐわない、適切とは言えないような使い方がよく分かるようになる。一口に「乱れ」といわれてきたことが更に分析できるようになったといえる。そこで、「敬語」の面からそして、「敬意表現」の面から「言葉の乱れ」を考えてみたい。

「敬語」の面からでも問題は多い。一般に誤用と考えられるものについては、誤解、学習の不足などによる思い込みによる誤りや、その誤解などによる誤りの定着したものが上げられる。「お召上がり方」などは誤用が定着しつつあるものだといえるが、その他にも、昨今多く聞く、「ご使用してください」等の「ご～する」を尊敬語として使う誤用も今や定着しつつある勢いで広がっている。(注3)さらに、規範自体が移り変わっていく過程での「ゆれ」とも言える誤りもある。先に上げた「ら抜き言葉」などに相当するものだが、たとえば、「食べる」意味で使う「いただく」などは、「食べる」が謙譲語から普通の言葉に変化したのと同様の変化が今起こっていると見え、「ゆれ」といえるものの典型的なものである。また、まだ「ら抜き言葉」ほど一般的ではないが、「さつき言葉」とか「さ入れ言葉」と言われる、「終わらせていただきます」なども、新しい形が一般化していく過程にあるものと言えるだろう。これは、使役動詞を持つ五段型動詞と持たない一段型動詞の違いから来る違い、「五段型動詞(例えば「終わる」など)の使役動詞(「終わらせる」)」プラス「ていただく」(「終わらせていただく」)と、「一段型動詞の未然形(例えば「始める」など)プラス「させる」プラス「ていただく」(「始めさせていただく」)という違いがあったものを、「させていただけます」がこの形で一語であるという意識のもとに、「動詞の未然形」プラス「させていただく」と言う形に変わっていったわけである。(「終わらせていただく」→「終わらせていただく」)「させていただく」が

この形で一般化し、間接尊重語（注4）（謙讓語）の典型的な形として台頭していく過程とも考えられる。

また、この他の「敬語」の問題として、あまり意識されていない地域差の問題もある。例えば「おられる」が問題になったり、相手に対して「おりますか」ときくことがおかしいと指摘する声がある。もちろん規範的な立場からは誤用とも言えるものであるが、「おる」に関しては地域差があり、主に西日本で「いる」の代わりに「おる」を使うことが多い。自分側の表現に使うという間接尊重語（謙讓語、丁寧語）としての「おる」ではなく、普通の語として「いる」の代わりに「おる」を使う、あるいは、「いられる」という言い方はないが、普通の語としての「おる」に直接尊重語である「られる」をつけた「おられる」が一般的な表現として使われる地域が実際にあるのである。これらは地域差とは意識されにくいいため、「乱れ」と感じられることが多い。また、最近九州方面から登場していると見られる「待たれてください」など「～れて下さい」という形は標準的には誤用であるが、九州などではこれを「標準語の敬語」と意識して使っているようである。地域方言の敬語が衰退していく中で、その代わりとして使われる共通語の敬語は地域全体で習熟していないために、誤った形が正しいものと意識されて広がることもあるという例である。これも地域差に基づく「乱れ」であるといえよう。

つぎに、「敬意表現」の面から、つまり、相手、場面にそぐわないものとしての誤用、ゆれを考えてみる。敬語や敬意表現は言葉自体が正しくても、使う相手や場面によっては違和感をもたらしたり、失礼になることも多い。実際の気持ちにかかわらず、相手を上位のものとして扱うかどうか、違う立場として相手の立場を尊重するかどうか、相手を自分に恩恵をもたらすものとして扱うかどうかなど、人間関係をどう認識しているかは言葉に反映される。その人間関係のとらえ方が違ってくると、双方の違和感が増すことになる。場面についても同様で、TPOなどとも言われるが、その場の雰囲気やふさわしい言葉遣いはもちろん、その他にも服装、態度なども関係してくる。特にその場の雰囲気があらたまっているか、くだけているかについては敬語、敬意表現と関係が深い。これらについて、いくつかに分けて考えてみる。

相手、場面のとらえ方の認識の誤りから来るもの、つまり、目上の相手（例え

ば先生)である相手をそれと知らず、友人のように扱ってしまった、あるいはそれほど格式張った会だと思わずにラフな格好をしてきてしまった、などのような場合である。

相手、場面のとらえ方は正しいが、表し方が誤っている場合がある。つまり、授業の後教師に向かって、丁寧にしようとして、「御苦労様でした」あるいは、「お疲れ様でした」などというような場合である。「御苦労様」はもちろん、「お疲れ様」も教えを受けた相手に対して言う言葉ではない。これはむしろ言葉の面での誤用とも言える。

相手、場面のとらえ方の慣習が確立しておらず、人によって解釈の異なる場合もある。それは、昨今中学校高校などでは教師に対してでも、特に敬語を使わず、いわゆる「タメ口」をきく、友達扱いたし言葉遣いをする人が多いと聞か、大学においても教師に対して友達扱いたし言葉遣いをするようなことである。学生は教師に対して特に失礼だという意識がなく、そういうものだと思っているからそのように話すのであろう。これは、若い世代と社会人以上の世代での認識の違いとも考えられるが、とらえ方の習慣が異なるために来るものと考えられる。これは、次の場合の例であるとも言える。

相手、場面のとらえ方が人によりはっきり異なる場合がある。例えば、微妙な例であるが、ある大学院生が授業を参観させてもらった日本語教師に、その感想などをまとめることを求められたのに対し「喜んで」と答えた。日本語教師はそれを不快に思った。この例は、日本語教師の方は自分が指導的な立場にあると認識し、授業を見せたことに対しまとめることを要求することは「指示」であると考え「書いてください」と言った。それに対し、大学院生は相手を指導的な立場とは捉えず、同僚のような意識で、書くことを「依頼」されたと感じ、それに対する答えとして「喜んで」と答えた、ということで、双方のとらえ方の違いが不快感を呼んだものと考えられる。また、あるレストランのチェーンで、注文に対し厨房で「喜んで」と答えるという報道を見たことがあり、筆者はこれに違和感を覚えるが、それは本来断わることのできない「指示」である注文に対し、断わることのできる「依頼」に対する返答としての「喜んで」を使ったということから来るものであろう。同様に、仕事上での付き合いしかない特に親しくない同じ職場の同僚に対し、家族に関する情報などの個人的なことを言ったり、外見上の

ことについてなど個人的なことに関する誉め言葉を言うようなことは不快感を与えることがある。友人関係といえるような個人的関係ができて初めて、プライバシーに関することや個人的な誉め言葉を言うことができるのである。仕事上での付き合いしかない関係の中での個人情報のやり取りは違和感をもたらす可能性がある。もちろん、同じ立場、同年輩であるなどの条件がそろった場合、親しくなり、友人関係になる場合も多いが、その過程においては個人情報や誉め言葉は相手や状況を見ながら言う必要があることである。

以上のことは、相手、場面のとらえ方、ならびにその表し方について、共通の意識といえるようなもの、ある意味では「規範」と呼べるようなものが確立していないこと、それらについて十分意識されておらず、議論や研究も進んでいないことがすべての原因であるようにも見える。これも、丁寧さについては「敬語」だけに焦点があたり、その他の面についてはおろそかにされてきたことの影響であると思われる。

5 おわりに

「言葉の乱れ」とはどのようなものであるかを考えてきた。この中で特に敬意表現に関するものは、今までその意識や研究の中心が敬語に集中していたため、それほど考えられてこなかったところである。変化の大きい現代において、これからはもっと議論されるべき問題であり、さらに新しい規範の確立を日本語話者全員が考えていかなければならない問題であると考えられる。

注1 井上史雄1998『日本語ウォッチング』岩波新書 に詳しい。同書はゆれ、乱れについても扱っている。

注2 筆者もその委員の一人である第22期国語審議会では2000年12月に「現代社会における敬意表現」ほかを答申した。

注3 坂本恵2000「<ごく漢語>してください、<ごく漢語>される等の誤用について」『麒麟』9号

注4 敬語の分類、用語については蒲谷・川口・坂本1998『敬語表現』大修館書店による